

S. Ashina

＜前回＞西欧近代とキリスト教

（１）近代の時代区分—近代という時代—

1. トレルチ：おおよそ 17 世紀までと 18 世紀以降において区切られた古プロテスタンティズムと新プロテスタンティズムの区別（厳密な意味における近代が啓蒙主義から始まる）。近代が宗教改革とルネサンスという二つの基本的傾向によって規定されている。
3. 啓蒙主義：単なる政治思想や思想運動を超えた、「生の全領域にわたる文化の全面的変革」(eine Gesamtumwälzung der Kultur auf allen Lebensgebieten, ibid., 339)。
5. ティリッヒ：「数学的自然科学、技術、経済」の「三重の活動性」(dreifache Tätigkeit)とその担い手としての「市民社会」として捉え(Tillich, 1926, 32-36)、また啓蒙主義に関しても、その内実について、理性概念（普遍的、批判的、直観的、技術的理性）、自然概念（超自然に対する）、調和概念（世界観的、教育的、経済的）という観点から分析を行っている(Tillich, 1972)。
6. ブルジョワ社会＝近代：革命(17-18 世紀)、勝利(19 世紀)、崩壊・変容(20 世紀)という三つの段階を区別(Tillich, 1945)。
7. パネンベルク：『ドイツにおける新しい福音主義神学の問題史』（Pannenberg, 1997）。19 世紀のドイツ・プロテスタント神学の問題状況を規定するものとして宗教改革後の宗教戦争の帰結、つまり教派的多元性の状況に注目。

19 世紀以降——ヘーゲル以降——の神学を含めた思想全般における「人間学への転回」(Die Wendung zur Anthropologie)が、まさにこの 18 世紀の思想状況へと遡るものであって、パネンベルク自身の神学構想が神学的人間学を方法論的基礎としているからに他ならない(Pannenberg, 1996, 294-367)。(4)

8. この講義の立場。

キリスト教思想史の観点から、狭義の「近代」は、18 世紀の啓蒙思想以降とし、それ以前は、近代の萌芽期（16 世紀、依然として中世の延長線上にある）、近代への移行期（17 世紀）と区分する。

（２）時代区分についての注意事項

10. 動的プロセスとしての「近代」という歴史時代を、一義的かつ客観的な仕方で前後の歴史時代から区別することは困難。
12. 「近代」を論じる上での留意点
 - ・「近代」は多様であり、複合的である。
 - ・18世紀のイギリスは近代、しかし、日本は近代以前（近世）。同じ時代に、近代とそれ以前が混在する。「近代」は地域横断的な画一的時代というよりも、一定の特徴によって規定され地域的に多様な「歴史段階」というべきか。

（３）近代のメルクマール

13. 「近代」は研究者によって主観的・主体的に設定されるものであり、純粹客観的な時代区分ではない。したがって、区分を行うためのメルクマールが必要になる。
14. 近代（システム）を構成するサブシステム。
 - ・政治あるいは国家：絶対王制から国民国家、議会制民主主義あるいは立憲君主制
近代憲法に基づく法体系（基本的人権、信教の自由、政教分離）
 - ・経済：近代資本主義、市場経済→自己変革する資本主義
 - ・科学：ニュートン物理学をモデルとした実証主義的科学 → テクノロジー
大学制度を頂点とした教育システム→社会の学校化
出版・マスコミ、
大衆文化・芸術の大衆化

- ・再帰性の制度化

継続的な自己観察に基づく自己実現・アイデンティティ
セルフ・セラピー

アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社。

- ・多元化（あるいは断片化）とグローバル化の相互促進

(4) 西欧近代とキリスト教

14. 両義的な関係性

キリスト教は近代の母体であるが、近代以前（近代以降）である。

キリスト教は近代と親和的であるが、反近代的でもある。→ 教派的多元性
多様な関係があり得る。

2. 啓蒙主義と理神論

(1) 啓蒙的近代とその意義

5. 近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス

キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起

社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。

キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学

6. カント「啓蒙とは何か」（『啓蒙とは何か』岩波文庫）

「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜けでることである、ところでこの状態は、人間がみずから招いたものであるから、彼自身にその責めがある。未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である」、「他人の指導がなくても自分自身の悟性を敢えて使用しようとする決意と勇気を欠く」、「それだから「敢えて賢かれ！（Sapere aude）」、「自分自身の悟性を使用する勇気をもて！」——これがすなわち啓蒙の標語である」（7）、「人間の根本的な考え方の真の革命」、「自分の理性をあらゆる点で公的に使用する自由」（10）、「啓蒙を進歩せしめることこそ、人間性の根源の本分だからである」（14）、「宗教上の事柄に関して何ひとつ国民に指図することなく、むしろこれらの事については彼等に完全な自由を与えることを義務と見なし、そのような言明を彼自身の尊厳にふさわしからぬものと認めないような君主」、「自由の精神」（17）、「啓蒙の重点を主として宗教に関する事柄に置いた」（18）

7. 啓蒙主義とは？（ジャンタル・ムフ『政治的なるものの再興』千葉眞他訳、日本経済評論社）

- ・「啓蒙の抽象的普遍主義、社会的全体性に関する本質主義的構想、単一の主体の神話」「啓蒙の認識論的視座」「自己の基礎づけにかかわる啓蒙のプロジェクト」
- ・「万人の平等と自由とを成就していった近代の政治的プロジェクト」

Alister McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

7. A Dead End? Enlightenment Approaches to Natural Theology. pp.140-170.

8. 啓蒙主義の思想的意義：

政治プログラム：絶対主義批判、理性の自立性・人権、普遍主義、人間解放

認識論における合理主義・普遍主義：

自由と自律(autonomy) → 国家と教会という他律的権威への批判

他律的宗教批判あるいは宗教の合理化

9. 啓蒙主義の思想的特徴：

ティリッヒ『キリスト教思想史II』（別巻三）白水社。：自律、理性、自然、調和 →

市民としての人間、合理的宗教、コモンセンスの道徳、主観的感情。

「神は世界を造ったが、今や世界は自己自身の法則に従う。神はもはや干渉しない。干渉はすべて計算可能性の喪失を意味する。このような干渉は受け容れがたいものであり、それゆえあらゆる特殊啓示は否定される必要がある」（68）、「地獄の恐怖も排除された」（69）、「恵みと同様、有限性、絶望、不安といった実存的要素も除かれた」、「残るものは、道徳的要素、しかも、ブルジョワ的な正義と安定という角度から見られた道徳である。靈魂不滅の信仰も残る。それは、死後も進歩改善を続ける人間の能力を意味していた。」（70）

↓

理神論

（2）理神論＝啓蒙主義的宗教論（17～18世紀、イギリスからフランス・ドイツへ）

国家や教派を越えた決定的な影響力

10. エドワード・ハーバード(Herbert, Edward 1581-1648、チャーベリーのハーバード)

ジョン・ロック(Locke, John 1632-1704)：経験論哲学、広教主義、宗教的寛容や政教分離、『キリスト教の合理性』(*The Reasonableness of Christianity*, 1695)

ジョン・トーランド(Toland, John 1670-1722)：『非神秘的なキリスト教』(*Christianity not mysterious*, 1695)

カント『単なる理性の限界内の宗教』(1793), *Innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*
Emanuel Hirsch, *Geschichte der neueren evangelischen Theologie im Zusammenhang mit den allgemeinen Bewegungen des europäischen Denkens.*

11. 理神論、キリスト教の合理化の試み → キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。

12. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。

ハーバード『真理について』(1624)：理性宗教（自然に備わった生得的なもの）

最も本質的な最高存在が存在する、最高存在への崇拜、敬虔な崇拜は美德である、罪は悔い改めによって贖わなければならない、来世（因果応報的）の存在

13. スピノザ(1632-77)『神学・政治論——聖書の批判と言論の自由 上下』岩波文庫。

「前章に於て我々は、人間に真の幸福を与え・真の生活を教える神の法はすべての人間に普遍的であることを示した。のみならず我々はそれを人間の本性から導き出したので、それに依れば、神の法は人間の精神に生得的であり、いわば人間の精神に書き込まれていると考えてよいのである」（上 172）

手島勲矢『ユダヤの聖書解釈——スピノザと歴史批判の転回』岩波書店。

↓

近代聖書学へ

14. F.L.Cross and E.A.Livingstone (eds.),

The Oxford Dictionary of the Christian Church. Third Edition, Oxford University Press, 1997.

Deism (from *Lat.* Deus, 'God'). The term, orig. interchangeable with Theism (q.v.), i.e. belief in one Supreme Being as opposed to atheism and polytheism, is now generally restricted to the system of natural religion which was first developed in England in the 17th and 18th cents. Among its precursors are P. Charron, J. Bodin (c.1530-96), and esp. Lord Hebert of Cherbury (q.v.), who in his *De Veritate* (1624) set out five truths common to all religions. J. Locke, though himself objecting to the title of 'Deist', also profoundly influenced subsequent developments through his *Reasonableness of Christianity* (1695). The classic exposition of Deism is John Toland's *Christianity not Mysterious* (1696), which argues against revelation and the supernatural altogether. S. Clarke, in his *Demonstration of the Being and Attributes of God*

(1704-6), distinguished four classes of Deists. For the first, God is only the Creator, with no further interest in the world; the second group admit a Divine Providence, but only in the material, not in the moral and spiritual, order; the third believe in certain moral attributes of God, but not in a future life; and the fourth accept all the truths of natural religion, including belief in a life to come, but reject revelation. (465)

(3) 教養市民層の宗教

15. 啓蒙的近代の宗教状況。

ヒュームの自然宗教（人間の自然本性に基づく合理的宗教）論の描く世界

クレアンテス：理神論者、フィロ：懐疑論者、デメア：有神論者

16. 啓蒙主義の多様性：イギリス、フランス、ドイツ。→比較思想研究

17. 近代ドイツにおける宗教の分化：世俗化の一つの形

ルター派／カトリック

教養市民の宗教／農民の世界／都市労働者の世界

18. 「教養市民とは、十八世紀末ないし十九世紀はじめ以降のドイツで「教養」の理念を核として輪郭をととのえていった一つの身分を指し、具体的には、ギムナジウムと大学で新人文主義的教育をうけた、ごく少数のエリート層を意味する。」（野田、21）

「各時期にもっとも活力に富んでいた筈の新しい宗教運動ないしは思想運動が、いずれもいちはやく国王とその周辺の一とにぎりのエリート層の側に吸いとられ、民衆の側に既存エリートにたいする対抗文化を興隆させる拠りどころとはなりえなかった。いいかえれば、少数の支配層が次から次へと新しい宗教や思想を食欲に摂取してその階層文化をゆたかにしたのにたいし、非エリート大衆の側は不活発で守旧的ルター派のカルチャーのなかにまどろみつづけたのだった。」（212）

イギリスのメソヂストとドイツの敬虔主義の違い。

↓

社会の安定化のために教会的宗教にも価値を見出しているが、自らの宗教性は、教養化し個人化してゆく（フランス啓蒙との相違）。

cf. 近代日本の教養主義

竹内 洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』
中公新書。

<参考文献>

『トレルチ著作集』（ヨルダン社）。

『ティリッヒ著作集』白水社。

1. 大津真作 『啓蒙主義の辺境への旅』世界思想社。
2. 安酸敏眞 『レッシングとドイツ啓蒙——レッシング宗教哲学の研究』創文社。
3. 芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
4. 大木英夫 『新しい共同体の倫理学——基礎編・上下』教文館。
『組織神学序説——プロレゴメナとしての聖書論』教文館。
5. 近藤勝彦 『デモクラシーの神学思想』教文館。
6. 加藤節 『ジョン・ロックの思想世界——神と人間との間』東京大学出版会。
7. デイヴィッド・ヒューム『自然宗教に関する対話』法政大学出版会。
8. 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のこころみ』名古屋大学出版会。